

# スポーツ系大学生の

## online to offline/offline to online (O2O)

### 活用の現状と今後の課題

スポーツマネジメントゼミナール 1314018 河野 航大

#### 1. 研究動機・研究目的

2011年の春頃からネット業界の関係者の中で話題に上り始め、2017年現在O2Oという言葉はネット業界にとどまらず店舗を持つリアル企業のマーケティングや広告・販促部の間など世の中に広まってきている。そして、SNS等の使用頻度が非常に高い。特に若い世代には、生活の中で欠かすことのできないものの一つになっている。具体的にあげるとTwitter・Facebook・Instagram・LINE等である。

若い世代は新聞等の紙媒体からの情報取得頻度が減少している。また、テレビなどのニュースから情報を得る機会も少なく、SNS等からの情報取得がメインになっている現状がある。現在の社会の中には情報が溢れていて、一昔前のように情報を受け手として得る時代から情報を選んで得る時代になってきている。

さらに、IoT・人工知能(AI)等の技術も向上していて今後盛んになっていくことが期待され、インターネットが盛んになってきていてネットショッピング等も盛んになってきている。実店舗での買い物にはクーポンやアプリなどを使った販売の仕方が増えてきていたり、実店舗で販売されている商品の値段とネット販売の値段を比較して購入したりと消費者の行動の仕方もネットというものに大きく関わるようになってきている現状がある。

そこで、現在SNSやスマホ・タブレット端末を中心に盛んになっているonline to offline/offline to online(O2O)の認知度を調査するために頻繁にSNSやスマホ・タブレット端末等を使用されていると思われる自分たち若者世代にO2Oの認知度と共にアプリ等の使用方法を知るべくアンケート調査をする。

本研究の目的は、O2Oが今後発展するのか、発展していくにはどのような方法・手段があるのかを考察することであった。

#### 2. 研究方法

1)文献研究：SNSやインターネット等の現在盛んなコンテンツに関連する論文や記事等を収集した。また、IoTや人工知能(AI)等の論文や記事等も収集した。

2)アンケート調査：Google Formを用いたweb調査

(1)調査対象者：J大学在籍の1年生266名、2年生22名、3年生8名の合計296名

(2)調査期間：2017年6月30日

(3)調査項目：1)個人的属性、2)SNS関連、3)O2O関連、4)アプリ関連

(4)分析方法：回収したデータはSPSS version23を使用し、記述統計、クロス集計、 $X^2$

検定を行った。

### 3. 主な結果と考察

自分の時間が多い人が多いことが分かり、自由な時間がある人が情報を得ようとする傾向にある。自分の時間がない人は、そもそも情報を手に入れても行動することがしにくいという状況であることも分かった。さらに、スマホの普及率の高さとネット環境の整備によって情報が手軽に手に入る時代になってきていることが分かった。多くの情報が手に入ることから O20 というものは現状として盛んになっていることが分かってきた。

買いたいものや行きたい場所がある人の方が多いことは具体的な情報を得ようとしている機会が多いということである。情報収集をするために自分の時間を使っていることも分かった。他には、SNS の認知度利用率の高さは分かったが SNS などでの O20 への認知度は非常に低いことが分かった。認知度が低いにも関わらずショッピングサイトやアプリ等の具体的な名前が出てきた。このことから利用している人は多いということも分かった。

また、自分の時間が多いとオンラインを使用する機会が多く、情報に触れる機会が多くなっているということである。また、自分の時間がないとオンラインを見る機会も少なくなっている。

スマホを持っている人は 100% の SNS 利用率であることが分かった。このことから調査対象者である若者（J 大学の学生）は SNS が必要不可欠なものになってきていることが分かった。また、スマホだけでなく、PC・タブレット端末で情報を得ることができる時代になっていることも分かってきた。

### 4. 結論

本調査では、J 大学のスポーツ系大学生 1 年生を対象に調査を行った。スポーツ系大学生の年代は非常に若く、ネット社会に慣れ親しんでいることが分かった。また、SNS の利用率も 100% であり、10 代や 20 代のスマホ普及率の高さと SNS の重要性は非常に高くなっていることが分かった。言葉の認知度が低いにも関わらず利用率は非常に高いという点が新たなビジネスとして今後の展望の未来が明るく感じる。

さらに、スポーツ系大学生を対象として調査をしたためスポーツが SNS 等を非常に相性が良く有効的に使用していることを知った。先行研究からも明らかのように、O20 の事例が非常に多かった。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を終えて多くのことを学ぶことが出来たと感じる。一つことに没頭し、研究することの大変さや何度も直しを入れる忍耐力等の今までにはない程の苦労を味わったとともに終わった時の達成感を感じる事が出来た。これらの苦労や達成感というものは、今後社会に出ていく上で自分の大きな糧になっていくと思われる。

また、本研究で先行研究を読み進めたことで多くの情報を得ることが出来た。ネットだけでなく裏付けのある情報は信用できることを改めて気づいた。